

令和6年度病虫害発生予察予報第4号(令和6年7月)

令和6年7月5日
高知県病虫害防除所

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量※
水稲 (早期稲)	いもち病(穂いもち) 紋枯病 ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ 斑点米カメムシ類	<u>多(中央、中西、西)</u> 、平年並(東) <u>多(西)</u> 、やや少(東、中央、中西) <u>多(西)</u> 、平年並(中央)、やや少(東、中西) <u>多(中央)</u> 、やや多(西)、平年並(中西)、少(東) <u>多(県下全域)</u> <u>多(県下全域)</u>
水稲 (普通期稲)	いもち病(葉いもち) ごま葉枯病 ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ	<u>多(中央、西)</u> 、平年並(中西)、やや少(東) <u>多(中西)</u> 、やや少(東、中央、西) <u>多(中央)</u> 、平年並(東)、やや少(中西、西) <u>多(西)</u> 、やや少(中央)、少(東、中西) <u>多(県下全域)</u>
カンキツ類 (温州ミカン)	そうか病 黒点病 ミカンハダニ	<u>多(中央)</u> <u>やや多(中央)</u> <u>やや多(中央)</u>
カンキツ類 (中晩柑類)	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ	やや少(県下全域) <u>やや多(東)</u> 、平年並(中央)、やや少(中西、西) 平年並(東)、少(中央、中西、西) <u>多(西)</u> 、平年並(中央、中西)、やや少(東)
果樹類	果樹カメムシ類	<u>多(県下全域)</u>
青ネギ	ネギアザミウマ	<u>多(中央)</u>

※ ()内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部
 県東部：安芸市、室戸市および安芸郡の町村
 県中央部：高知市、南国市、香美市、香南市、長岡郡・土佐郡の町村、
 吾川郡いの町および高岡郡日高村
 県中西部：土佐市、須崎市、高岡郡(日高村を除く)町村および吾川郡仁淀川町
 県西部：四万十市、宿毛市、土佐清水市および幡多郡の町村

I 気象予報(高松地方気象台6月27日発表)

7月1日から7月31日までの天候見通し

<予想される向こう1か月の天候>

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間のはじめはかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の日照時間は、期間はじめに前線の影響を受けにくいいため、平年並か多いでしょう。

週別の気温は、1週目は高い確率が80%です。2週目は高い確率が70%です。3～4週目は、高い確率が60%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

期間	対象地域	要素	低い(少ない)		平年並	高い(多い)
1か月	四国地方	気温	10	10	80	
		降水量	30		40	30
		日照時間	20	40		40

<気温経過の各階級の確率(%)>

期間	対象地域	低い		平年並	高い
1週目	四国地方	10	10	80	
2週目		10	20	70	
3～4週目		10	30	60	

<予報の対象期間>

1か月：7月1日(月)～7月31日(水)

1週目：7月1日(月)～7月7日(日)

2週目：7月8日(月)～7月14日(日)

3～4週目：7月15日(月)～7月28日(日)

II 病虫害発生予想

1 早期稲の病虫害

1)いもち病(穂いもち)

予 想 発生量：多(中央部、中西部、西部)、平年並(東部)

根 拠

(1) 6月の調査では、県下全域で葉いもちの発生が見られ、発生面積は県中西部および西部で平年よりも多く、中央部ではやや多く、東部ではやや少なかった。発病程度は、いずれの地域も平年並以下であったが、進行型病斑が散見されている。

(2) 早期稲の主要品種であるコシヒカリの出穂期は6月24日頃から始まっている。BLASTAM(葉いもち発生予測システム)では、6月下旬に県下全域で感染好適条件が確認されていること、四国地方の向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されていることから、穂いもちの発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、QoI剤の使用回数は作期を通じて1回とする。

2) 紋枯病

予 想 発生量：多(西部)、やや少(東部、中央部、中西部)

根 拠

- (1) 6月の調査では県西部で発生が見られ、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりも高かった。
- (2) 本病は高温、多湿条件で発生が助長される。向こう1か月の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並と予想されていることから、既発ほ場だけでなく昨年度本病の発生が見られたほ場を中心に病勢が進展すると考えられる。

対 策

- (1) 止葉まで発病すると稔実が悪くなり減収するため、発生の多いほ場では穂孕期および穂揃期に薬剤防除を行う。

3) ツマグロヨコバイ

予 想 発生量：多(西部)、平年並(中央部)、やや少(東部、中西部)

根 拠

- (1) 6月の調査では県下全域で発生が見られ、発生面積は県西部で平年よりやや多く、中央部ではやや少なく、東部および中西部では少なかった。発生程度はいずれの地域も平年並以下であった。
- (2) 向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 近年、本虫が媒介する萎縮病の発生はほとんど発生していないが、出穂期から登熟期にかけて高密度になると稔実が悪くなることがあるので、その場合は他の病害虫とあわせて防除を行う。

4) セジロウンカ

予 想 発生量：多(中央部)、やや多(西部)、平年並(中西部)、少(東部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、県中央部、中西部および西部で発生が見られ、発生面積は中央部で平年よりも多く、西部では平年並、中西部ではやや少なかった。また、発生程度はいずれの地域も平年並以下であった。
- (2) セジロウンカはトビイロウンカと同様に、6~7月に中国大陸等から飛来してくる害虫であるため、未発生地域でも発生が見られるようになると考えられる。また、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) ほ場内での発生に注意し、高密度になった場合には薬剤防除を実施する。

5) トビイロウンカ

予 想 発生量：多(県下全域)

根 拠

- (1) 6月の巡回調査では発生は見られなかったが、県内2か所に設置した予察灯のうち、南国市廿枝で6月28日にトビイロウンカ(1頭)の初誘殺を確認した。南国市では過去10年間でこの時期に本虫の誘殺が確認されたことはなく、平年よりも1か月以上早い発生であるため、早期水稲においても坪枯れが発生する可能性が考えられる。
- (2) 向こう1か月の気温は平年より高いと予想されていることから、本虫の増殖に好適となるため、発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 本虫は株元に寄生するので、防除を行う場合は株元に薬剤が十分かかるようにする。

6) 斑点米カメムシ類

予 想 発生量:多(県下全域)

根 拠

- (1) 6月の調査では、県下全域で出穂前からクモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ等の発生が確認されている。また、6月中旬のアザミウマ類のすくい取り調査においても、クモヘリカメムシ等が捕獲されている。
- (2) 向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、本虫の増殖や活動に好適な条件が続くことから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 出穂期以降にカメムシ類の発生がわずかでも見られる場合、斑点米の発生が予想されるので、穂揃期及びその7~10日後に防除する。ただし、イネカメムシの発生が多い場合には、出穂期の加害により不稔となる恐れがあるので、出穂期に防除を実施する。
- (2) ミナミアオカメムシの発生が見られる場合は、合成ピレスロイド剤の効果が劣るので、他系統の剤(ネオニコチノイド剤等)を用いる。

2 普通期稲の病害虫

1) いもち病(葉いもち)

予 想 発生量:多(中央部、西部)、平年並(中西部)、やや少(東部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は県中央部および西部で平年よりも多く、中西部ではやや少なく、東部では少なかった。発生程度はいずれの地域も平年並以下であった。
- (2) BLASTAM(葉いもち発生予測システム)では、6月下旬に県下全域で連続して感染好適日が確認されていること、四国地方の向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、QoI剤の使用回数は作期を通じて1回とする。

2) ごま葉枯病

予 想 発生量:多(中西部)、やや少(東部、中央部、西部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、県中西部で発生が見られ、発生面積は平年よりも多く、発病程度は高かった。
- (2) 向こう1か月の気温は平年より高いと予想されていることから、現在発生が見られない地域でも常発ほ場を中心に発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 適切な中干しや水管理を実施し、根の活力を維持する。
- (2) 穂軸や枝梗に発生すると穂枯れを生じるので、発生が見られるほ場では薬剤防除を実施する。

3) ツマグロヨコバイ

予 想 発生量:多(中央部)、平年並(東部)、やや少(中西部、西部)

根 拠

- (1) 6月の調査では県下全域で発生が見られ、発生面積は県中央部でやや多く、東部ではやや少なく、中西部および西部では少なかった。発生程度はいずれの地域も平年並以下であった。
- (2) 向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 近年、本虫が媒介する萎縮病の発生はほとんど見られていないが、出穂期から登熟期にかけて高密度になると稔実が悪くなることがあるので、その場合は他の病害虫とあわせて防除を行う。

4) セジロウンカ

予 想 発生量:多(西部)、やや少(中央部)、少(東部、中西部)

根 拠

- (1) 6月の調査では県中央部および西部で発生が見られ、発生面積は西部で平年よりも多く、中央部では少なかった。また、発生程度はいずれの地域も平年並以下であった。
- (2) セジロウンカはトビイロウンカと同様に、6~7月に中国大陸等から飛来してくる害虫であるため、未発生地域でも発生が見られるようになると考えられる。また、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、本虫の増殖には好適となることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) ほ場内での発生に注意し、高密度になった場合には薬剤防除を実施する。

5) トビイロウンカ

予 想 発生量:多(県下全域)

根 拠

- (1) 6月の巡回調査では発生は見られなかったが、県内2か所に設置した予察灯のうち、南国市廿枝で6月28日にトビイロウンカ(1頭)の初誘殺を確認した。南国市では過去10年間でこの時期に本虫の誘殺が確認されたことはなく、平年よりも1か月以上早い発生であるため、例年よりも早く坪枯れ被害が発生する可能性が考えられる。
- (2) 向こう1か月の気温は平年より高いと予想されていることから、本虫の増殖に好適となるため、発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 移植時にウンカ類を対象とした箱施用剤などによる防除を実施していない場合は、7月下旬に薬剤撒布を実施する。本虫は株元に寄生するので、防除を行う場合は株元に薬剤が十分かかるようにする。

3 カンキツ(温州ミカン)の病害虫

1) そうか病

予 想 発生量:多(中央部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりもやや高かった。
- (2) 四国地方の向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 幼木や発生の多い園地では、黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤撒布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

予 想 発生量:やや多(中央部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、発生面積、発生程度ともに平年並であった。
- (2) 四国地方の向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生をできるだけ少なくするように管理する。
- (2) 前回の防除以後の累積降雨量が250mm前後に達した時点で次の撒布を行う。一般的には5月中下旬から7月上旬の間に3回程度、8月下旬から9月上旬にかけて1~2回撒布する。発病の多い場合は適宜撒布回数を増やす。

3) ミカンハダニ

予 想 発生量:やや多(中央部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、発生面積は平年よりもやや多く、発生程度は平年よりも低かった。
- (2) 向こう1か月の気温は高いと予想されている。本虫は高温期には増殖が緩慢となることから、現在の状況が続くと考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

4 カンキツ(中晩柑類)の病害虫

1) そうか病

予 想 発生量: やや少(県下全域)

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部、中西部、西部のポンカン、ユズ等で発生が見られた。発生面積は県下全域で平年よりも少なく、発生程度は東部、西部で平年並、中央部、中西部で低かった。
- (2) 四国地方の向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 幼木や発生の多い園地では、黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

予 想 発生量: やや多(東部)、平年並(中央部)、やや少(中西部、西部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部、中央部、中西部で発生が見られ、発生面積は県東部で平年並、中央部で平年よりもやや少なく、中西部で少なかった。発生程度は東部で平年並、中央部、中西部で低かった。
- (2) 四国地方の向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生をできるだけ少なくするように管理する。
- (2) 前回の防除以後の累積降雨量が250mm前後に達した時点で次の散布を行う。一般的には5月中下旬から7月上旬の間に3回程度、8月下旬から9月上旬にかけて1~2回散布する。発病の多いほ場では適宜散布回数を増やす。

3) かいよう病

予 想 発生量: 平年並(東部)、少(中央部、中西部、西部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部のポンカンで発生が見られ、発生面積、発生程度とも平年並であった。
- (2) 四国地方の向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されているが、台風の来襲がない限り発生の増加は少なく、現在の状況が続くと考えられる。

対 策

- (1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢は剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

予 想 発生量: 多(西部)、平年並(中央部、中西部)、やや少(東部)

根 拠

- (1) 6月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は県西部で平年よりも多く、中央部、中西部で平年並、東部でやや少なかった。発生程度は、西部で平年よりも

高く、中西部でやや高く、中央部、東部では低かった。

(2) 向こう1か月の気温は高いと予想されている。本虫は高温期には増殖が緩慢となることから、現在の状況が続くと考えられる。

対 策

(1) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

5 果樹類の病害虫

1) 果樹カメムシ類

予 想 発生量:多(県下全域)

根 拠

(1) 県内4地点に設置したフェロモントラップによる6月の誘殺数は、県下全域で平年を大きく上回った。

(2) 6月のカンキツ園およびナシ園の調査では、県下全域で飛来や被害果の発生が確認されている。いずれも発生面積は県下全域で平年よりも多かった。

対 策

(1) 果樹園周辺の雑木林から飛来してくるので、ほ場内をよく観察して、飛来を確認したら速やかに防除を実施する。

6 青ネギの病害虫

1) ネギアザミウマ

予 想 発生量:多(中央部)

根 拠

(1) 6月の調査では、全調査ほ場で発生が見られ、発生程度は平年よりやや低かった。

(2) 四国地方の向こう1か月の気温は、高いと予想されていることから、発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) 同一系統の農薬を連用すると抵抗性が発達しやすいので、異なる系統の農薬をローテーション散布する。

農作物の病害虫防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病害虫防除所ホームページ(こうち農業ネット)<https://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/?sid=2016>

- ①病害虫発生予察月報、病害虫発生予察予報
- ②病害虫発生予察注意報、病害虫発生予察警報、病害虫発生予察特殊報
- ③病害虫発生予察技術資料
- ④新しく問題となっている病害虫 etc.

高知県農薬情報システム <https://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/haishinfile/list/kochi>

- ①農薬の検索
- ②農薬データの一覧
- ③配信ファイルの閲覧(農薬安全使用、病害虫防除指針 etc.)